

悠久録

お盆用意

「盆と正月が一種に来たようだ」というたとえがある。めでたいことが重なったり、忙しい仕事を立て込んだりするときのことわざである。盆は正月と並ぶ一年の中で最大行事である

八月に入るとお盆の月という気分になる。一日は盆ぼち一日と言ってお寺にお参りする。昔はお寺にお米や野菜などを持って行く風習があった。「盆ぼち」とは「盆扶持（ぼんぶち）」が訛り、毎年8月1日に行われるので「ぼんぼちつたち」とい言うようになったという。お寺では、盆供養のお経が終わると御齋になる。その時のおかずは油味噌だった。それが旨くて、子どもの頃油味噌を食べるのが楽しみだった

七日はお墓の草取り。仏壇の掃除やお墓参りの道の草取りなども共同作業で行った。この日上流から薬が流れてくると母は言っていた。川水で髪を洗う習慣があったようだ。お盆という「祭り」シーズンに先立つ「禊ぎ」（みそぎ）の行事と解釈する説が有力である。

盆下駄・盆提灯の用意もこのころ行った。普段は歯のすり減った下駄を履いていてもお墓参りに行くために新しい下駄を買ってもらえた。そして子供がうれしかったのはお墓に持ってゆく提灯だった。お盆は亡くなった先祖の魂が帰ってくる日である。提灯は亡くなった祖先の霊を迎えるための提灯だった。所によっては「ジジ達、ババ達この明りについてござれ」と言って仏を家に案内するところもあるという。あるいは玄関先で迎え火を焚いてなくなった人の霊を迎えること事をしたようだ。心弾む八月であった

(ひこぜん)